

相撲界に「新しい期待」を

岡本 三保

今、角界がいろんな意味で注目されている。力士の礼儀、品格にも目が向けられ、論議されているが、私は、とても清々しい「力士たち」に昨年出会った。

それは、中津市立津民小学校の子ども達である。実は、私の在籍校の子ども達なのだが、私は今年度赴任したばかりで、自己啓発休業中なので、まだこの学校の教壇には立ったことがない。しかし、「子ども達が相撲大会をするので見に来ませんか。」と誘われて見に行った。

そこで、子ども達の姿に心打たれた。1年生から6年生まで、女の子も男の子も真剣勝負。最後の最後に負けが決まるまでは粘りに粘って「名勝負」がいくつも続く。相手の年齢が一つ上でも、明らかに体の大きさに違いがあっても、それは同じで決してあきらめない。実に気持ちのいい姿だった。

そこで、私は「司書教諭修行中の身」として良いことを思いついた。こんなに真剣に相撲にがんばる子ども達だから「相撲情報ファイル」を作ったら興味を持って読んでくれるのではないかと、学校図書館に本を探しに来てくれるのではないかと。

私は、さっそく相撲調べにかかった。これは面白い仕事だった。そして、もう一人、実に清々しい力士、双葉山に出会う。私の地元、宇佐市の誇る力士、そして今も朝日新聞の「天声人語」の話題に上るほどの名力士。

今回は、この「相撲情報ファイル」について報告させていただきたい。もともと小学生向けの情報ファイル作成のための取材なので、大人の方には少々物足りない内容になるかもしれないし、何より図書館に詳しい方々の投稿にこのような初心者の投稿が紛れ込むことをお許しいただきたいと思う。

そして、さらに情報ファイルについてもっとこうしたほうが良いとのご示唆をいただければ、と願っている。

1、相撲情報ファイル作成について

(1) 作成の意図

子どもたちが熱心に取り組んでいる「相撲」に関連したファイルを作ることで、①～④のような状況を生み出すことができないだろうかと考えた。

- ① 子どもたちの関心を学校図書館に引き付ける。
- ② 子どもたちの関心を様々な資料に引き付ける。
- ③ 読書の幅を広げる。
- ④ 自分でも調べてみたいという意欲を引き出す。

(2) 作成上の留意点

- ① 「情報ファイル」というものにまだなじみのない子どもたちに手にとってもらえるように、ファイルそのものを読んで楽しいものにする。

- ② 手にとって見ることもできるが、相撲大会の練習期間中は掲示物としても使えるような形態にする。

(3) 内容

- ① 相撲にまつわる話
- ② 郷土の力士紹介
- ③ 郷土の名力士“双葉山”の逸話
- ④ 参考文献・関連図書の紹介
- ⑤ 双葉の里（双葉山生誕の地・資料館）の紹介
- ⑥ 新聞の切り抜き

(4) 作成の手順

① 収集したもの

- ・ 相撲にまつわる話で、子どもの関心を引きそうなもの。ここでは、相撲の起源、土俵、化粧回し、ちゃんこ鍋の話など。
- ・ 相撲絵本、読み物。
- ・ 「双葉の里」のリーフレット、資料（図書、双葉山の手形つきの手ぬぐい）
- ・ 「相撲展」のリーフレット、資料（図書、相撲番付表）
- ・ 新聞の切り抜き

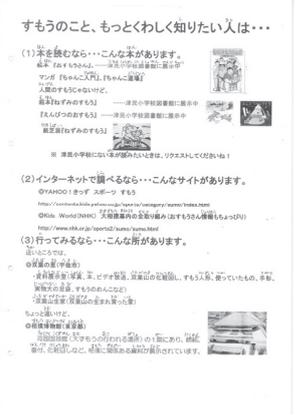
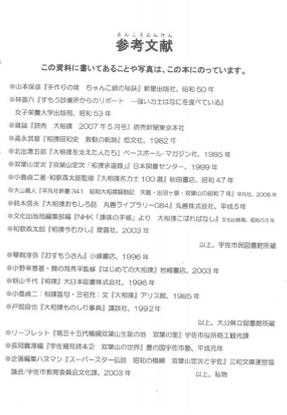
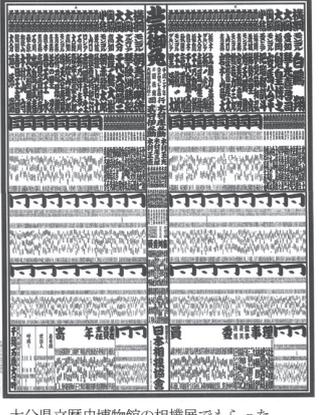
② 分類

全国学校図書館協議会編『小学校ファイル件名標目表』もあるが、1982年発行のものなので、現在学校でもよく使われそうな件名で載っていないものもある。たとえば、「環境問題」「地球温暖化」「調べ学習」「インターネット」「ホームページ」等々。それで、情報ファイルの分類も全国学校図書館協議会件名標目表委員会編『小学校件名標目表 第2版』（2004年発行）によることにする。

③ 装備

- ・ すべて台紙に貼る。台紙は八つ切りの薄手ケント紙に統一する。
- ・ 1枚ずつ掲示したり、増やしたりすることもできるようにリング綴じにする。

(5) 実際の情報ファイル

<p>〈表紙〉</p> 	<p>〈1枚目〉</p> 	<p>〈2枚目〉</p>  <p>写真は双葉山定次『双葉山定次「相撲求道録」』 日本図書センター、1999年より</p>
<p>〈6枚目〉</p> 	<p>〈8枚目〉</p> 	<p>〈9枚目〉</p>  <p>大分県立歴史博物館の相模展でもらった 相模番付表</p>
<p>〈展示資料〉</p>  <p>双葉の里で、資料等と一緒に売られていた手ぬぐい。ファイルを展示している間、同時にそばに他の資料と一緒に展示したいと考えているもの。</p>		

2、相撲について

(1) 相撲はいつ頃からあったのか

今のイラン辺りにあった 5000 年ほど前のバビロニアの国の遺跡から、相撲人形が出たり、エジプトのベニ・ハッサン横穴の壁に描かれた相撲図が見つかったりと、外国にも古くから今の相撲に似ているものがあつたらしい。

日本では、1500 年ほど前に、今の島根県にいた「野見宿禰^{のみのすくね}」と今の奈良県にいた「当麻蹴速^{たいまのけはや}」が、どちらもそれぞれの地元では「向かうところ敵なし」といわれるほど強かったため、二人に力比べをさせたのが相撲の始まりだという説がある。ちなみにこの勝負の軍配は、「野見宿禰^{のみのすくね}」に上がった。

また、そのもっと昔、「建御雷神^{たけみかづち}」「建御名方神^{たけみなかた}」という神様どうしが力比べをしたのが始まりだという伝説もある。

(2) 土俵が四角？

昔は、土俵が「四角」だったり、見物する人たちが相撲を取る人を囲む、いわゆる「人垣」が土俵のかわりだったこともあるけれど、それでは危ないということで、だんだん今のような円い形になつたらしい。

(3) なぜ四股を踏むのか

昔は今と違って、相撲をスポーツではなく「亡くなった人の魂や悪霊を鎮めるもの」と考えていたらしい。力強く足踏みする四股も、今では“気合”とか“様式”のように思われているが、昔は攻めてくる怖ろしいものを威嚇し、追い払うためのものだった。

(4) 化粧回しとは何か

化粧回しというのは十両以上の力士が土俵入りの時に使うもので、贈る人やそれをつける力士のいろいろな思いをこめてつくられた煌びやかな回しのこと。

化粧回しの生地は、長い一本の帯になっていて、幅はおよそ 1 メートル、長さはおよそ 7 メートル。体の大きい力士になると、9 メートルくらいになることも。

値段は、1 本 100 万円から、ダイヤモンドを嵌め込んだ 1 億 5000 万円くらいのもので、すべて後援者からの贈り物。

(5) 強い力士は何を食べているか

力士と言えば「ちゃんこ鍋」と思う人も多いと思うが、夏でも冬でも 1 日 1 回は「ちゃんこ鍋」を食べるらしい。安く、たくさん作れる、旬のものを多く使える、だれでも簡単に作れる、栄養たっぷりですばるバランスがよい、というのがその理由。

相撲部屋ごとに味付けは違い、『ちゃんこ鍋』の味が体に染みついてこなければ、相撲は強くならん」という親方も。実際、どうしてもちゃんこ鍋になじめず、部屋を去っていく力士も

いた。

「ちゃんこ」というのは相撲界で「食事をする」ことを指す。だから、「ちゃんこ」はカレーライスだったり、カツ丼やお寿司だったりすることもある。

力士の食事は、1日2回で、朝稽古後に「ちゃんこ」したら昼寝をする。それが、大きくて強い体をつくり、たくさんの練習に耐えられる体力をつける。

(6) 第35代横綱双葉山

① 略年譜

明治45年(1912年) 大分県宇佐郡天津村(現在の宇佐市下庄)に生まれる。本名は稚吉定次。

昭和2年(1927年) 15歳 立浪部屋に入門。双葉山として初土俵を踏む。

昭和11年(1936年) 24歳 歴史に残る連勝箱の時から始まる。このときは、東前頭三枚目。

昭和12年(1937年) 25歳 横綱双葉山誕生。

昭和14年(1939年) 27歳 安芸ノ海に負けて69連勝が止まる。

昭和20年(1945年) 33歳 引退。その後は、親方・相撲協会の理事として務めを果たす。

昭和43年(1968年) 56歳 病気のため、永眠。

② 人柄

子どもの時から体は大きかったけれど、友達や小さい子にも優しく、喧嘩は嫌い。相撲も本当は、はじめは好きではなかったらしい。

親孝行で、12歳くらいの時からお父さんを助けて大人にも負けにくいくらい力のいる仕事をして、がんばっていた。この時がんばったおかげで、誰にも負けにくい強い体の元ができたのではないかとされている。

力士になり、横綱になってからも、決して自慢したり威張ったりすることはなかった。69連勝したのに、初めて負けた後も「明鏡止水、淡々たる態度を見せた…」と周りの人々からの賞賛を浴びた。けれども、本人は、友人や恩師にその時の自分の心情を「イマダモツケイタリエズ」と告白していた。「モツケイ」とは「木鶏」と書き、中国の『莊子』や『列氏』などの古典に出てくる寓話に出てくる鬪鶏のことを指している。鬪鶏使いの名人が、王の鶏が鬪鶏として完成の域に達したことを“いかなる敵にも無心です。ちょっとみると、木鶏(木で作った鶏)のようです”という話である。恩師から聞いたこの話を双葉山は勝負の世界に生きる自分にとって実に得がたい教訓だと思い、ひそかに自分もこの木鶏のようでありたいと願っていたらしい。

人前では、無口だと言われていたが、普段はよくしゃべり、ユーモアもあって、けっこうおしゃれにも気を使い、今で言ういわゆるブランド品を身に付けていたりもした。

③ 右目の秘密

子どものときの怪我がもとで、大人になった時は、右目が見えていなかった。しかし、そのことは誰にも言わなかったのも、身近にいても気付かなかった人も多かった。

もちろん相撲の時にも「目」に頼らず、見えないことが相撲に影響しないような工夫をし、「体で見る」「心で見る」ように心がけていた。

④ 立ち会いは1回

双葉山の相撲は「力水を1回しかつけない」「待ったをしない」という相撲だった。自分で

も著書の中で「土俵に上がってからは、無駄な動きをしない。土俵に上がった時からは勝負で、いつでも受けて立つ、という心がまえを持っていた。」と書いている。

いわゆる正攻法の相撲の取り方しかしないので、それ故に角界に入ったばかりのころは、負けてしまうことも多く「うっちゃり双葉」と称されることもあった。しかし、気にせずとにかくコツコツと稽古に稽古を重ねたことが、結果として双葉山を誰にも負けない強い力士に鍛え上げていった。

今年度は、休業中ということで、直接子どもの反応をみることができないので、このファイルがどのように受け止められたかを報告することができない。できるだけ子どもの興味を引きそうな話題をと考えてつくってはみたものの、本当に興味を引くものかどうか、自分たちの相撲とプロの相撲とを重ね合わせてみることができるか、ファイルのレイアウトにも改善の余地がたくさんあるのではないかと、という課題は残るものの、これを機会にいろいろなジャンルのファイルを作って生きたいと考えている。

【参考文献】

- 藤田利江『学校図書館入門シリーズ 10 学習に活かす情報ファイルの組織化』全国学校図書館協議会、2004年
- 山本保彦『手作りの味 ちゃんこ鍋の秘訣』新星出版社、昭和50年
- 林盈六『すもう診療所からのレポート ー強い力士はなにを食べている』女子栄養大学出版部、昭和53年
- 雑誌『読売 大相撲 2007年5月号』読売新聞東京本社
- 高永武敏『相撲昭和史 激動の軌跡』恒文社、1982年
- 双葉山定次『双葉山定次「相撲求道録」』日本図書センター、1999年
- 小島貞二著・和歌森太郎監修『大相撲名力士100選』秋田書店、昭和47年
- 大山真人『平凡社新書341 昭和大相撲騒動記 天龍・出羽ヶ嶽・双葉山の昭和7年』平凡社、2006年
- 鈴木信夫『大相撲おもしろ話 丸善ライブラリー084』丸善株式会社、平成5年
- 文化出版局編集部編『NHK「趣味の手帳」より 大相撲こぼればなし』文化出版局、昭和53年
- 和歌森太郎『相撲今むかし』星雲社、2003年
- 小野幸恵著・舞の海秀平監修『はじめての大相撲』岩崎書店、2003年
- 初山千代『相撲』大日本図書株式会社、1996年
- 戸部良也『大相撲ものしり事典』講談社、1992年
- 長岡義淳編『宇佐細見読本② 双葉山の世界』豊の国宇佐市塾、平成元年

(おかもと・みほ 別府大学文学部研究生 中津市立津民^{つたみ}小学校教諭)